

スポーツ選手の引退会見に思う

さかねもとひこ
坂根 元彦

●日本郵政グループ労働組合（JP労組）・労働政策局長

昨年はラグビーワールドカップが開催され、出身国が違うメンバーで構成された日本代表選手の活躍と「One Team」という言葉が話題になりました。

ラグビー選手によらずスポーツ選手は、試合に向けた厳しいトレーニングをしなければならない大変な職業だと思う。オフシーズンで数か月に及ぶトレーニングを積んでいてもボクシングといった格闘技では、一瞬で勝敗が決まってしまうこともある。

また、どんなに素晴らしい選手でも長年競技を続けていく間には、年齢や体力的にも厳しくなる状況となり、いつかは現役を退く日がやってくる。そして全力を尽くした選手が引退する時の会見では、それを見ている人に感動を与えてくれるものだ。ここで私が印象深かったものを紹介したい。

まずは、「…体力の限界…気力もなくなり、引退することとなりました…」。

これは聞いたことがある方もいると思いますが、昭和最後の優勝力士となった千代の富士関の引退会見の一部です。

第58代横綱となった千代の富士関は、生涯戦歴1045勝437敗159休（125場所）、幕内戦歴807勝253敗144休（81場所）で幕内最高優勝31回、幕下優勝1回の成績を残している。

得意技の上手投げで体格を上回る力士を勢いよく土俵の下に投げ飛ばすシーンは、大いに観客を喜ばせたと思う。そして他の力士にない筋肉質の体格は、現在の優勝経験のある力士においても稀な体格だったことが記憶に残る人も多いと思う。

その引退をよぎらせたのは貴花田関になる。現役最後の対戦相手ではなかったが、若手の躍進を感じて引退を決意したそうだ。

もう一つは、2018年のサッカーワールドカップ（ロシア大会）での日本代表主将だった長谷部選手の代表引退は印象的だった。

当時の代表メンバーは本田選手や香川選手をはじめ、長友選手、岡崎選手、乾選手などを含む精鋭ぞろいものだった。その中で、年下でもある長谷部選手が主将として2010年から約8年

間、チームをまとめてきた。

予選のグループリーグでは、3戦で1勝1分1敗の成績でセネガルと勝敗結果が並んだが、警告数などのフェアプレーポイントの差で日本代表が優位になり、みごとに決勝トーナメントに出場となった。

初のベスト8入りが目標となった決勝リーグで日本代表はベルギーと対戦。前半は0-0で折り返し、後半には2-0でリード。その後ベルギーの反撃で同点へ。そして試合延長時間内にベルギーのカウンター攻撃で惜しくも負けてしまったが、その試合内容は海外メディアからの高い評価を受けるものでもあった。

試合終了直後は、ピッチ上で悔し涙を流す選手が多くいた中で、長谷部選手は涙することもなく、他の選手を労うなど最後まで主将として責任を果たしていたのだと思う。

数時間後には、ネット上で代表を退くことを決断した長谷部選手は、これまでのサポーターへのお礼とともに今後は自身もサポーターとして日本代表を応援していく旨を表明した。

これに関連して、後輩の吉田麻也選手は「世間では真面目なキャラと通っていますが。実際は本当に頑固で一緒に仕事をすると面倒くさいと思うことも多くあったが。…それでも彼から学ぶことは沢山あったし、僕よりも年齢が上の選手たちと一緒にやれる最後の大会だったので、最後にみんなで何かを成し遂げたかった」と思いを涙ながらにインタビューに伝えていたことが感慨深いものとなっている。

翻って、私たちの生活でも、3月末には会社員生活を終える方もいると思います。今後は現役生活から離れてのんびり過ごす方もいれば、新たな職場でチャレンジをしていく方もいるのではないかと思います。私たちにおいても、スポーツ選手の世界とは若干違っていることもありますが、何らかの目標に向けて努力していくことは同じだと思います。また、後進に何を残していくのかも同様かと思っています。

労働組合においては、まもなく春闘が始まります。多くの組合員の期待に応えるよう最善を尽くし、成果にこだわった春闘としていきたい。